

9

丸田知明さん

**丸田知明 (丸田知明建築設計事務所)**

愛知県と北海道を拠点とする一級建築士。個人住宅、店舗、クリニックなどの設計・監理のほか、美術館や展覧会の会場構成、しつらえなども手がける。SIAFや国際芸術祭あいちでは、主催事務局に所属するアーキテクトとして活動し、SIAFには2017年開催から参加。

トーク内容

- SIAFには芸術祭専属のアーキテクト(建築家)がいる
- 作品展示を施工・法規面で支え、裏方調整を担う存在
- 会場設営や海外作家の要望対応など、多面的に活躍
- SIAF2024では、雪など環境条件を踏まえたサイン計画も担当
- 芸術祭の廃棄物削減に向けた取り組みは、今後の課題のひとつ



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。

<https://youtu.be/MYJjz4pau7w>



Q 芸術祭におけるアーキテクト（建築家）の役割とは？

僕が「アーキテクト」として芸術祭に関わるようになったきっかけは、あいちトリエンナーレ（現・国際芸術祭あいち）2016でした。すでにあいちでアーキテクトを務めていた、建築家の武藤隆さんにお声がけいただいたんです。

アーキテクトが芸術祭の主催事務局に所属しているというのは、あまりピンとこないかもしれませんがね。その道を切り開いたのは、前述の武藤さんであり、比較的新しいポジションかと思います。簡単に言うと、芸術祭で必要なあれこれの「施工面」を取りまとめる役目を担っています（SIAFと国際芸術祭あいちでは、求められている役割がそれなりに違うのですが）。SIAFには2017年から携わって、2020、2024と続けて参加しています。

やることは多岐にわたります。作品ごとに施工方法を考えるのはもちろん、会場の入り口やお客さんが歩く動線まで気を配ります。それをスムーズに実現するためにスケジュールを組んだり、消防法や建築基準法などの法律もきっちりクリアしていく。海外作家が「この素材を使いたい」と言っても、それが日本で手に入らないこともあるので、代わりになる材料を探したりもします。

芸術祭ならではの仕事といえば、会場間や最寄り駅などをつなぐ「サイン（標識）」の設置です。芸術祭は一度に複数の会場で展開されることが多く、それぞれの会場案内の施工を考えるのもアーキテクトの役割です。民間のアートイベントとは異なる手続きも必要になるので、アーキテクトが内部でそのフォローをしています。

武藤さんからは「裏方に徹しなさい」とアドバイスをもらいました。建築家としての自己主張よりも、とにかく裏から全体をうまく回していくことが大事だ、と。芸術祭が大規模になればなるほど、アーティストや関わる業者さん、職人さん、デザイナーさんなど関係者は増えて複雑になります。その中で、みんなが気持ちよく動ける環境づくりを心がけています。

今後は、芸術祭で出る廃棄物の削減も重要になってきます。どんな資材を使うか、それは再利用できるか。これらの工夫ができると環境面だけでなく、予算面でも有利になります。特に地方の芸術祭だと予算は限られがちなので、こういった取り組みはますます欠かせません。

アーティストや芸術祭が求めるものは常に変わり続けます。そこがアーキテクトをやっている面白いところ。できる限り日本中の展示会を見に行き、最新の施工技術や素材をチェックし、日々の仕事に生かしています。
